

示-17 日本病理剖検輯報(1958~85年)による肺原発悪性非上皮性腫瘍(肺肉腫)症例の検討 ——肺癌症例との比較——

浜松医科大学病理学教室 ○森田 豊彦

目的：演者は1983年(第24回)以来本学会で日本病理剖検輯報の肺癌症例を中心に、男女、年齢、組織型別肺癌例の検討、肺癌含む重複癌、肺多発癌、気管及び気管分岐部癌などにつき報告してきた。今回は肺肉腫の頻度、その内容、推移などにつき検討し報告する。

方法：剖検輯報の肺原発が明らかな肉腫症例を厳選し、男女別に、年齢を考慮し検討し、10年区分(第3期は8年)の第1~3期に分けてその推移をみた。胸膜中皮腫、癌肉腫は除いた。

結果：頻度 合計で男性148例、女性71例を集計し得た。男女比は2.1で従来の報告より高い。肺癌10000例に対し男性41、女性59例の頻度に相当し、肺癌との相対頻度は男女とも期別に僅かだが漸減していた。

内容 男性1期：横紋筋肉腫5、悪性リンパ腫3例、2期：平滑筋肉腫14、横紋筋肉腫8例、3期：悪性リンパ腫16、平滑筋肉腫12例。女性1期：平滑筋肉腫と悪性リンパ腫各3例、2期：悪性リンパ腫7、平滑筋肉腫 6例、3期：横紋筋肉腫4、平滑筋肉腫3例などが上位を占めていた。

平均年齢 1~3期の順に男性55、55、64歳、女性38、51、48歳で女性が一般に若く、肺癌のような高齢化が明らかでなかった。3期男性のみは肺癌と差がなかった。10歳未満症例は男性4、女性8例であった。

示-19 空洞形成を呈したHCG産生細気管支肺胞型腺癌の一例

関西医科大学第一内科¹，中検病理²，第二病理³

○米津精文¹，佐野博則¹，鈴木淳一¹，安永幸二郎¹，泉 春暁²，乾 俊彦³

症例は39歳，女性。胸部異常陰影を主訴として昭和61年8月23日入院。入院時，両側上肺野腫瘤影，左肺優位の大小種々の結節性陰影，空洞影を認め，又尿中HCG 540 Iu/day，胸水中HCG 6500 mIu/mlと高値を認めた。経気管支肺生検にて細気管支肺胞型腺癌の診断を得，又免疫組織学的にHCG陽性であった。CDDPを主体とする制癌化学療法にて尿中，血中HCG値の一時的低下を認めたが，これら値は増加傾向を示し，空洞化を伴う腫瘍影増大も認め治療無効のため，62年9月に退院した。退院後も陰影増悪し，63年1月には頭皮腫瘤も認め，さらに呼吸不全をきたし同年2月2日に死亡した。剖検にて右肺には米粒大から空洞を伴う鶏卵大までの種々の大きさの腫瘍を散在性に認め，左肺では左下葉ほぼ全域が空洞化する腫瘍と，部位により厚さ4cmに達する全周性胸膜肥厚とを認めた。組織学的には，両側多発性腫瘍は粘液を豊富に含む細気管支肺胞型腺癌で，一部に未分化な腺癌像を認めた。免疫組織学的に前者はHCG陽性で，後者は陰性であった。未分化な成分は左胸膜，頭皮，腸間膜に転移を認めた。

現在まで検索した範囲では細気管支肺胞型腺癌ではHCG産生腫瘍は見出されておらず，又，空洞を伴う報告例は7例と少ない。

以上，本症例は極めて稀な症例と思われ報告する。

示-18 広島原爆病院における肺癌剖検例の病理学的検討

広島赤十字・原爆病院 第2検査部¹，内科²
楠部 滋¹，赤水博史¹，有田健一²，吉見達也²

原爆被爆者の肺癌症例について，被爆後の経年的な病理学的特徴の変化を検討する目的で，広島原爆病院における1958年以来30年間の肺癌剖検例278例(被爆者161例，非被爆者117例)を対象として，組織標本および剖検記録の見直しを行った。

被爆者肺癌例161例の組織型別頻度は，腺癌67例(41.6%)，扁平上皮癌47例(29.2%)，小細胞癌32例(19.9%)，大細胞癌11例(6.8%)，腺扁平上皮癌4例(2.5%)であり，いずれの組織型の頻度も非被爆例と有意差はなかった。

1958年以降を5年ごとに6期に分け，主要組織型別にその占有率の経時的推移をみると，腺癌は1期の25%から漸増して，6期には50%を占めた。扁平上皮癌は1期の50%から6期は22.2%に減少していた。小細胞癌は2期には他の組織型を凌駕して38.5%を占めたが，それ以後は漸減して6期には11.1%であった。

全期間を前半と後半に分け，被爆距離群別に小細胞癌の占有率の推移を検討した結果，爆心地から2km以上の被爆者および入市被爆者群では，前半の28.6%に対して，後半では6%と著しく減少していた。一方2km未満の近距離被爆者群では，前半が26.3%，後半は22.6%であり，後半でも尚，小細胞癌の減少傾向を認めなかった。

示-20 CEA, AFP, HCGが高値を示した Pulmonary blastoma の一例

香川医科大学第一外科¹，附属病院病理部²

○山本眞也¹，田中 聡¹，佐藤 明²

Pulmonary-blastomaは稀な腫瘍で，これまでに本邦でも約60例が報告されているのみである。しかも腫瘍マーカーが高値であった報告例はそのうちのわずか4例にすぎない。今回我々はCEA, AFP, HCGが高値を示した1症例を経験したので報告する。

症例は72歳の男性。右背腰部痛を主訴とし，某院での経皮的針生検で後縦隔悪性奇形腫と診断され当科に紹介された。術前CEAは4.7ng/ml，AFPは371ng/mlと高値を示した。またHCGは正常であった。右後側方切開で第9肋骨を切除しその肋骨床で胸膜外に腫瘍に達した。腫瘍は被膜で覆われ，胸壁背側面，横隔膜と強固に癒着し，右下葉は希薄になり腫瘍の表面を覆っていた。右下葉の一部と腫瘍を一塊に摘出した。腫瘍は12×10×10cm，760gで，断面は灰白色で軟らかく出血，壊死巣を認めた。組織学的検査で，腫瘍は胎児肺類似の腺腔構造を示す上皮性成分と，一部で横紋筋組織を有する紡錘形細胞の間質系成分からなり，一部にcarcinoid様パターンも認めるPulmonary blastomaと診断された。また酵素抗体法でCEAは陽性であったが，AFPは陰性で，HCGは数個の細胞のみが陽性であった。術後9日目に脊髄浸潤による下半身麻痺が出現し，60日目に死亡した。術前高値を示したAFPは術後低下し，CEAは術後一時低下したが病状の進行に伴い再び高値を示した。またHCGは術後の病状の進行とともに高値を示していった。